

論文

「偶像崇拜」の地・日本

——近世フランスの思想家ルイ・リショームの言説から——

小俣ラポー日登美

〔抄 録〕

16世紀にイエズス会によりカトリックキリスト教の宣教を受けた日本については、日本がいわゆる鎖国を行った後も、様々なイメージがイエズス会の活動を通じてヨーロッパに普及した。「偶像崇拜」の地であるという言説は、そのイメージの一側面である。本稿では、ローマにあるイエズス会母教会ジェズ教会の彫刻にあった日本の神仏についての刻印と、その制作の思想的背景を準備したと考えられるフランス人イエズス会士ルイ・リショームの著作にみられる日本関連の記述を分析する。その過程で、本著作での日本への言及は、近世ヨーロッパのカトリック教会にとってより大きな脅威であったプロテスタントやオスマン帝国の宗教だったイスラム教の比較対象として登場した事が明らかとなる。

キーワード 偶像崇拜、イエズス会、日本のイメージ、プロテスタント、イスラム教

はじめに

フォトケはここにあり。聖なるものの偉大なる父よ！

アミダ、不滅の生、運命を司るもの…

ここにあり、アミダ、カミ、テング、聖なるものの中でも、きわめて強きもたちのよ⁽¹⁾！

17世紀イエズス会ローマ学院の学校演劇より⁽²⁾

偶像崇拜の民族というのは魔法使いのようなもので、それについて語られることは多いが、決して存在したことはなかったのだ。

ヴォルテール『歴史哲学』より⁽³⁾

ローマの中心部に位置するイエズス会の母教会であるジェズ教会、その内陣に近い左翼廊に

位置するイグナチウス・ロヨラの礼拝堂の祭壇には、一対の石像がある（写真1）。この石像には、かつて「カミ、ホトケ、アミダ、シャカ（Cames, fotoques, Amida, Xaca [ママ]）」の言葉が刻印されていた（写真2）。これらは、日本語の話者の耳には、明らかに日本古来の神格たちの名を指す言葉に響く。イグナチウス・ロヨラは、近世ヨーロッパの対抗宗教改革の気運が高まる文脈で、新進の修道会たるイエズス会の創立者として活躍した。死後その功績は認められ、列聖もされた（1622）⁽⁴⁾。つまり、ロヨラは、単にイエズス会という団体の創立者としてだけでなく、その聖性のために全カトリック教会において信者の見本として崇敬される事が、カトリック教会の総本山バチカンから認められたのである。聖人となった創立者に献げられただけあり、この礼拝堂は、極めて豪華で精巧な機械仕掛けを有し、それ自体が視覚・聴覚に訴えかける総合芸術として近世の全盛期のイエズス会の理念、バロックの価値観を体現している⁽⁵⁾。機械仕掛けが稼働される夕刻には、世界中からローマを訪れた観光客が集まって、その束の間のショーを壮麗なバロック音楽の演奏と共に楽しむ。たださえジェズ教会の内部においても際だって一目につく場所にあるロヨラの礼拝堂は、こうしてその機械仕掛けによっても、現代まで人々の目を惹き続けているのだ。本稿では、この耳目を特に引きつける礼拝堂を囲むように置かれた石像に、日本の神格の名前が刻印されていた史的背景の一端を解明することを試みたい。その過程で、近世フランスの著名なイエズス会所属の思想家ルイ・リショーム（Louis Richeome, 1544-1625）の言説を、この彫刻の成立の思想的背景の一つとして紹介し、この人物の著作で開陳された日本観について解説する。

イエズス会と言えば、日本でのキリスト教宣教を開始させたフランシスコ・ザビエルを輩出したことでも有名であるが、写真の礼拝堂と彫刻が制作された17世紀末から18世紀初頭におい



写真 1



写真 2

ては、日本についての情報のヨーロッパへの流入は限定的であり、イエズス会の海外宣教の主戦場はもはや日本ではなくなっていた。イエズス会関係者による日本に関する欧州の書籍刊行物は近世を通じ多数あるものの、その作者の多くは日本を実際に訪れたことがなく、そうした書誌における情報の多くは伝聞である。リショームも例外ではなく、その日本観は、当時のヨーロッパのカトリック教会にとってより差し迫る脅威であった勢力——すなわちプロテスタントやオスマン帝国における宗教であったイスラム教——との比較により形成された。本稿では、こうした言説の分析も試みていきたい。

イグナチウス・ロヨラ礼拝堂を飾る一対の彫刻

この礼拝堂自体は、バロックの巨匠であり、自らイエズス会士でもあったアンドレア・ポッツォ（Andrea Pozzo, 1642-1709）の意匠によるものである。当時のスケッチから、現在も（途中一部はコピーに差し替えられながらも）この祭壇が創建当初の姿を維持していることが解る⁽⁶⁾。祭壇向かって右の彫刻は、「異端を踏みにじる宗教（*La Religion foulant aux pieds l'hérésie*）」と題された寓意像（写真3）で、フランス人彫刻家ピエール・ル・グロ（小もしくは二世）（Pierre Le Gros, le jeune もしくは II, 1666-1719）の作である⁽⁷⁾。この彫像の制作の過程や美術史的分析については、既に詳細な研究が存在するため、ここではこの群像を図像学的に解説するに留める⁽⁸⁾。

中央の女性像は「真の宗教」の寓意であり、彼女に倒されているのは異端の寓意である。その真横では「宗教」である女性の眷族たる天使が、本のページをむしりとしている。本は、異



写真3



写真4

端の教えを暗示するが、何の題名なのかは、現在は刻印が消されているため分からない。しかし、かつてここには、教典のタイトルとして「ルター」の名が刻まれていた⁽⁹⁾。つまりこの彫刻で「真の宗教」に倒されている「異端」は、ルターの運動から始まったプロテスタントを示唆しているのである。

そしてこの図像と対をなすのが、同じくフランス人彫刻家ジャン・パプティスト・テオドン（Jean Baptiste Théodon, 1646-1713）作の「偶像崇拜を地に倒す真の信仰（*La Foi terrassant l'Idolâtrie*）」の寓意像（写真4）である⁽¹⁰⁾。ここでも女性像が見られるが、これは「真の信仰」を象徴し、足で蛇のような頭の奇妙な生き物を踏みしめている。この動物は、ヒュドラーである。ヒュドラーは、ギリシア神話のヘラクレスの英雄譚に登場する不死身の怪物で、対抗宗教改革期の近世ヨーロッパ美術においては、異端的宗教の寓意として頻繁に造形された⁽¹¹⁾。この像におけるヒュドラーは、「信仰」に首根っこを足で踏みしだかれて精気のなくなった頭部を、くたびれた本の上に横たえている。この本のタイトルに刻まれていたのが、冒頭に述べた「カミ、ホトケ、アミダ、シャカ」の文言である。ただし、「信仰」像にすがっている王冠をいただく人物は、日本人ではなく、コンゴの王とされている。コンゴすなわち現在のアフリカ大陸アンゴラ北部の領域を支配していた王の一人が、すでに1491年にはキリスト教へ改宗した事例は記録されており、改宗し救われた異教徒の最初の例とみなされていたのである⁽¹²⁾。したがって、この像で表現された偶像崇拜とは、日本の神仏信仰を含む海外の「偶像崇拜」的とみなされた（そしてイエズス会にとって改宗による救済の対象とみなされた）信仰そのものと言えるのだろう。この彫像がおかれたロヨラの礼拝堂に対面する形で、イエズス会の海外宣教の先駆者となったフランシスコ・ザビエルの礼拝堂がおかれているのは、偶然ではない⁽¹³⁾。

二人の女神像が倒している対象を明示する刻印は、現在は跡形も見られない。しかし、駐バチカン市国日本大使を務めた上野景文氏によると、1980年代まではくっきりとその文言が遺されていた⁽¹⁴⁾。1960年代にすでに、この刻印が、日本語を解さない人々の間で一つの謎として捉えられていた事が、イタリア人イエズス会士の歴史家パスクアーレ・デリアによる解説から分かる⁽¹⁵⁾。確かに、カトリック教会の首長たるバチカンを擁するローマに存在するイエズス会の母教会内の、しかも創立者の祭壇という極めてシンボリックな場所におかれた寓意像において、日本の信仰の対象が「偶像崇拜」の究極的な象徴として表現されていたということは、容易に想定できることではない。

日本が偶像崇拜の地であるという言説は、日本に派遣された宣教師が遺した記録や、それを典拠にしたヨーロッパ内の刊行物にも頻繁に見られる⁽¹⁶⁾。例えば、イエズス会が最初に公式的な日本情報として出版を推進したジャン・ピエトロ・マフェイ（Giovanni Pietro Maffei）による『インド史（*Historia Indicarum*）』は、最初のイエズス会公認の海外宣教記録としてヨーロッパ各国語に翻訳され、その後のヨーロッパの日本観に大きな影響を与えたが⁽¹⁷⁾、偶像崇拜の記述はすでに本著の中にも見られる⁽¹⁸⁾。実際、被宣教地の信仰を偶像崇拜として記録すること

は、日本に限らず世界各地のカトリック宣教報告においてしばしば繰り返される⁽¹⁹⁾。ではなぜ、上述のジャン・パプティスト・テオドン像では、偶像の名として、特に日本の神格の名称が刻印されていたのだろうか。

彫像の図像学的なインスピレーション

従来、欧州の美術史家は、ル・グロ二世とテオドンの一対の彫像の図像学的な源泉が、フランスのイエズス会士ルイ・リショーム (Louis Richeome, 1544-1625) が執筆した書籍に求められるとしてきた⁽²⁰⁾。それは、『旧き異端の模範に照射されたユグノー的偶像崇拜 (*L'idolatrie Huguenote. Figurée au patron de la vieille payenne*)⁽²¹⁾』と、『暴かれ破壊されたユグノーのパンテオン：「カトリックの偶像崇拜」に対する回答 (*Le Panthéon Huguenot découvert et ruiné, contre l'auteur de l'Idolatrie Papistique*)⁽²²⁾』である。

ルイ・リショームは、フランスのみならず同時代のヨーロッパのカトリック文化圏において極めて大きな影響力を奮った思想家・著述家である⁽²³⁾。伝統的な神学的素養に裏打ちされた上で、イグナチウス・ロヨラの思想の影響を受けながら綴った図像学的な理論は、ラテン語ではなく比較的平易なフランス語で執筆されており、リショームの死後も、テオドンやル・グロ二世のようなフランス人彫刻家が参考にしたとしても不思議はない。というのも、リショームの絵画理論は、トリエント公会議後にイエズス会が目指した美的理念、とりわけ芸術の視覚的効用について述べたものとして有名で、ジェズ教会内部の意匠とも関連性があることは、つとに日本の美術史家の伊藤博明氏も指摘してきた通りである⁽²⁴⁾。ジェズ教会の身廊の36メートルにわたる天井画は、ロヨラの礼拝堂をデザインしたアンドレア・ポッツォによって描かれたものである。天井画自体は四大洲へのイエズス会の布教活動の勝利を賛美する表象で、同じくポッツォによりデザインされた礼拝堂前の一対の彫刻の掲げるテーマとも内容的に呼応する⁽²⁵⁾。ポッツォの天井画では、チェーザレ・リーパのエンブレム図像が意識された表象が試みられているが、本教会内のその他の場所においても、寓意的な表現が多様されており、アレゴリーを駆使したメッセージ性を視覚芸術において重要視していた当時のイエズス会の美的感覚を色濃く反映している⁽²⁶⁾。それは、ロヨラの礼拝堂における彫像においても例外ではない。

出版文化が開花した近世ヨーロッパで出版された書籍の扉絵は、本の内容を寓意的な図像で凝縮しているという性格上、エンブレムの一種としても捉えられてきた⁽²⁷⁾。リショームの『ユグノー的偶像崇拜』の扉絵 (写真5) や、『ユグノーのパンテオン』の扉絵 (写真6) もまた、アレゴリーのような表象で飾られている。フランスの美術史家のフレデリック・クシネは、そのエンブレム的表象が、ジェズ教会の一対の寓意的彫像の源泉であると指摘した⁽²⁸⁾。まず、1607年に出版された『ユグノー的偶像崇拜』の扉絵を見てみよう。古典建築で言えばエンタブラチュアにあたる部分の上部中央に、十字架と聖杯を手にもつ女性がいる (矢印1) が、これ

はテオドンとル・グロ二世の彫像にも登場する「真の信仰」のアレゴリーである。「信仰」を守護すべく、左右に武具を手にした天使像が描かれ（矢印2）、その足下の部分には聖書の引用、そしてその下のピラスターの部分には、通常武具に描かれるような装飾文様が施される。その文様のテーマは、左右それぞれ「悪魔的偶像（*idolatria diabolica*）」、「屈服された異端（*hæresi* [ママ] *subjugata*）」と明記されている（矢印3）。このため、天使が信仰から守るべき対象が明らかとなっている。信仰の敵として「偶像」と「異端」を対にする構図は、3年後に出版されたリショームの『ユグノーのパンテオン』の扉絵では、より明確に表現される（写真6）。

『ユグノーのパンテオン』の場合、上部中央には荒廃したパンテオンが描かれ、そこから様々な異教の神格が動物の姿で出てくる姿が描かれる（矢印1）。その左右には、それを倒すべく武器を手にしたペトロやパウロなどの使徒が集まっている。左右の柱のニッチには、「真の宗教」「真の信仰」のアレゴリーである女性がそれぞれ配され、各々が足で異形の怪物や敵を踏みしだいている（矢印2）。この構図は、まさにテオドンとル・グロ二世の一对の彫像と呼応するものとみなされるだろう。実は、この『ユグノーのパンテオン』は、出版こそフランス国内ルーアンで成されているが、執筆自体はリショームがフランス担当補佐官（*Assistant de France*）としてローマに派遣されていた間に行われ、この着想自体も当時のローマにおいて隆盛した思想に依拠している⁽²⁹⁾。

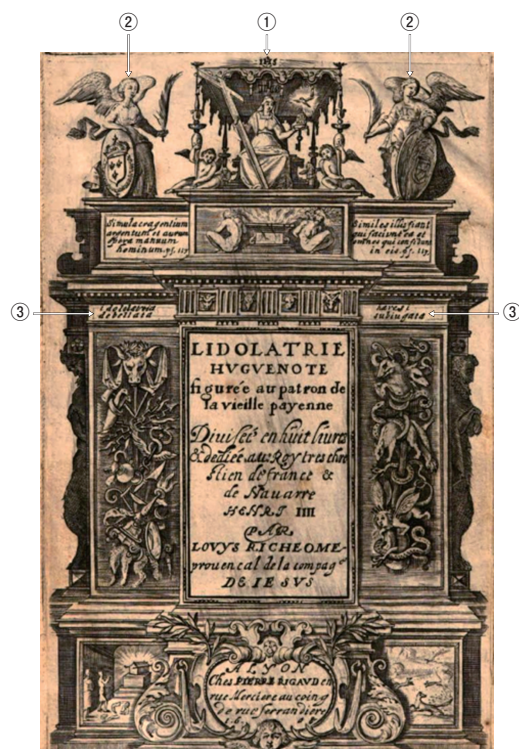


写真5 『ユグノー的偶像崇拜』



写真6 『ユグノーのパンテオン』

扉絵には、同時代に隆盛したエンブレムのように、一目でそれと分かる象徴的な図像によって本の内容が凝縮され、読まずとも本のメッセージが感覚的に認知されるようにするという重要な啓蒙的役割があった⁽³⁰⁾。扉絵には明示されないものの、実はリショームの本の内容は、日本の信仰についても述べている部分がある。したがって、リショームの本の内容に、ジェズ教会のロヨラ礼拝堂前の彫刻に日本の神仏の名が刻まれた背景を理解するためのヒントを求められるだろう。そこで、以下その内容を見てみたい。

リショームの『ユグノー的偶像崇拜』(1607)と 『暴かれ破壊されたユグノーのパンテオン』(1610)

リショームによる偶像崇拜関連二部著作のうち、最初に出版された『ユグノー的偶像崇拜』は、500頁を超える大著で、内容は一貫してプロテスタントへの誹謗中傷となっている。リショームが、ルターやカルヴァン、そしてその信奉者の様々な教義を解体するにあたって用いる手法が、プロテスタントの神学と古代多神教の偶像崇拜との比較である。最初の二部は、偶像崇拜 (idolâtrie) と異端 (hérésie) の定義を定めた上で⁽³¹⁾、特にプロテスタントに顕著に表れるとされている異端の証を羅列する⁽³²⁾。

その後、具体的な偶像崇拜の例が挙げていく。そのために、各章は古代ギリシャ・ローマ時代の神々の名前を冠し、その名で体现される特殊な偶像崇拜の形態を描くという構成をとる⁽³³⁾。例えば、女神ヴィーナスの名を冠した章では、ヴィーナスが愛の偶像として語られるが、リショームは、カルヴァン派の信仰を古代人のヴィーナスへの信仰に表面的になぞらえることで、彼らが淫蕩であると言おうとしている⁽³⁴⁾。同様の比較は、軍神マーズの章でも行われる。この章は、「自称改革宗教の扇動的な本質と偽神マルスの偶像がそれに内在される事 (“*De la nature factieuse de la Religion pretendue reforme: Et des Idoles du faux Dieu Mars, dressees en icelle*”)」と題される⁽³⁵⁾。そして、プロテスタントが、いかに暴力的にヨーロッパ中にその影響力を進捗させたのが描かれる。このように、プロテスタントの短所が、まずは古代の多神教の信仰との比較によって描き出されるのが特徴である。

古代信仰に続きリショームが比較の対象とするのは、イスラム教である。リショームによるイスラム教への言及の背景にあるのは、カトリック教会がトルコ人に対して行ってきた「聖戦」に対するプロテスタント側からの批判である。本書は、プロテスタントが行ってきた対カトリック教会批判も念頭におかれている⁽³⁶⁾。リショームに拠れば、プロテスタントがトルコ人への戦争を無意味であると考えたのは、プロテスタントが実際はトルコ人と同盟を組んでいるからなのだという反駁をしている⁽³⁷⁾。リショームの目には、プロテスタントとトルコ人はあまりにも共通点が多く映ったようである。曰く、彼らは「偶像崇拜」的であり（この特殊な「偶像崇拜」の術語の使用方法については後述する）、しかもモスクもプロテスタントの教会も聖

像がない。そして、何よりも彼らは同様に攻撃的である。リショームに拠れば、プロテスタントは「トルコ人」とその偶像に同調し、同じものを信じているといわんばかりですらある：「ルターと貴方達（プロテスタント）の創設者達がトルコ人を愛し、その偶像を寵愛している。そして、その偶像の不遇を嘆き、その台頭を喜ぶ。」⁽³⁸⁾。ここに挙げた例に類似するレトリックや、さらに過激な表現は、『ユグノー的偶像崇拜』で次々に展開される。

このような本は、当然のことながらプロテスタントに好意的に受容されたわけがなく、リショームに対する反論が直ちに翌年1608年ジュネーブで出版された。その名も、『偶像崇拜的カトリック教徒：ルイ・リショームの「ユグノー教徒の偶像崇拜」への反論 (*L'idolatrie papistique — opposée en réponse à l'idolâtrie des huguenots de Louis Richeome*)』である⁽³⁹⁾。原文の題名では、「カトリック」の語ではなく、「パピスティック（もしくは教皇派、*Papistique*）」というカトリック教徒への侮蔑的な表現が用いられる。これは、リショームが本の題名に掲げたユグノーというのが、カルヴァン派の自称ではなく蔑称であったことに対しての応酬である。作者のジャン・バンジリオン（Jean Banson, 156?-1640）は、リショームのテキストを丹念に引用しながら、それぞれの論点に対し緻密に反論を立てている。本稿においては全ての反論を紹介しないが⁽⁴⁰⁾、ここではバンジリオンが、プロテスタントの好戦的な性向という批判に対して答えた反論を紹介したい。その反論の文脈で、日本が以下のように言及されるからである：

…（前略）…、ローマ教会の処世訓に注目しよう。最初に、彼らは神の言葉を聞くことによって生まれる信仰を物理的な刃によって起こすものだと思っているのではないのか？

同様に、この世ならざるキリストの王国が、武器によって広まるものだと考えているのではないのか？ その証拠に、トルコ人と異端者に対する十字軍がある！ また、同様に、イエズス会が聖母教会の旗を持たらしてきたインド、日本、ペルーなどの国々の征服もその証拠だ⁽⁴¹⁾。

バンジリオンは、ローマカトリック教会の対トルコ人との争いを批判し、日本のような新しく確認された地域への宣教活動を「征服」と非難する。バンジリオンに拠れば、カトリック教会のこのような行為は無駄であり危険であり、プロテスタントよりもカトリック教会の方が「軍神マーズの偶像崇拜」者である証拠だとしている⁽⁴²⁾。

一方のリショームは、この反論を放っておくわけもなく、実際にバンジリオンの本に目を通し、反論に対しての更なる反論を出版している。それが、バンジリオンの本の出版二年後に上梓された『暴かれ破壊されたユグノーのパンテオン：「カトリックの偶像崇拜」に対する回答』である⁽⁴³⁾。この第二作目は、構造上は第一作目と極めて似通うものの、前作に比べて論理が発展しているほか、バンジリオンの批判に応える一章が付け加えられている。特に、「軍神マーズへの偶像崇拜」と題する部分では、再度「トルコ人に対しての聖戦」が言及される。しかも、「聖戦」の対象はオスマン帝国だけではなく、新たな宣教対象地として浮上してきた地域、

すなわち日本も含まれる⁽⁴⁴⁾。バンジリオン⁽⁴⁴⁾の投げかけてきた日本宣教への批判には、以下のよう
に断固として書かれている：

日本と他の多神教から改宗した民達について君（バンジリオン）がいつていることは、カ
トリック教会が70年前から、神の子の光明を（日本などの地へ）投げかけることが出来、
何万人もの哀れな偶像崇拝者の魂を救うことが出来たことに対しての苛立ちの顕れだ⁽⁴⁵⁾。

リショームは、対象がトルコにせよ日本にせよ、カトリック教会の起こすあらゆる聖戦は、
最も深刻な罪である偶像崇拝に対する戦いであるという点で正当化できるのだとする。そして、
この偶像崇拝という罪こそ、リショームが二冊の本において、一貫してプロテスタントに帰し
ている罪でもあった。このように、リショームが著作において意識している仮想敵というのは、
まずは「異端」たるプロテスタントであり、「偶像崇拝」のイスラム教および、新世界に新たに
発見された日本のような地の信仰であった。二冊の本の扉絵にも象徴的に表現されたように、
「異端」と「偶像崇拝」を様々な比較と比喩により定義し追及しているのである。しかし、仏
像・神像が盛んに制作された日本の信仰とは異なり、本来は聖像の制作を禁じているイスラム
教に対して「偶像崇拝」を謗るのは、現代的な感覚では矛盾があるように感じる。以下、その
レトリックが成立した史的背景を述べておきたい。

イスラム教に対して用いられた「偶像崇拝」のレトリック

イスラム教徒に対する「偶像崇拝」という非難は、実は十字軍の時代から見られる古典的な
レトリックである。例えば、「サラセン人が実は偶像崇拝者である」という言説が発生したのは、
イスラム化する以前のアラブ人が保有していた信仰による。それはメッカのカアバに置かれた
黒曜石に対しての崇拝である⁽⁴⁶⁾。中世を通じ、偶像崇拝主義者であるというイスラム教徒のカ
リカチュアは、西ヨーロッパにおいて増幅し、特にスペイン語圏、フランス語圏の文献に繰り
返し登場することになった⁽⁴⁷⁾。

また、イスラム教を形容するために、中世を通じ偶像崇拝と同様に用いられた誹謗中傷とし
て、卑猥さがある。例えば、『フランス略史の鑑 (*Mirouer historial abregié de France*)』(ca.
1451)の72葉では、イスラム教の予言者のムハンマドが女性に囲まれている図像が描かれる⁽⁴⁸⁾。
これは、イスラム教の天国では「男性は一日100人の処女（フーリー）とセックスが出来る」と
ムハンマドが述べたとされたことから西ヨーロッパにおいて醸成されたイスラム教のイメージ
である。中世西ヨーロッパのキリスト教作家らは、イスラム教の天国（jannah）を性的なプレ
イグラウンドであるとみなし、さらにイスラム教そのものが卑猥で暴力的であるとし、この種
の言説は様々な著作に反復された⁽⁴⁹⁾。

中世に醸成された偶像崇拝的なイスラム観は、近世においてもフランスのイエズス会士や、
それに近い人々の輪の中で継承されていた。例えば、パリのイエズス会学院があったサン＝

ジャック通り⁽⁵⁰⁾において1612年に再版された『ギリシャ帝国退廃史とトルコ帝国創建史（*L'histoire de la décadence de l'Empire Grec, et établissement de celui des Trucs*）』においては、メッカにおいてヴィヌスの偶像が拝まれているとされ、イスラム教の偶像崇拜が明確に批判されている。本書の原本は、コンスタンティノープルの陥落後にイタリアに亡命した東ローマ帝国出身の学者ラオニコス・ハルココンデュリス（Laonikos Chalkokondyles, ca. 1423-ca. 1490）が執筆した東ローマ帝国滅亡史である。この書は、東ローマ帝国の滅亡を身をもって経験したハルココンデュリスにより、帝国の衰退とオスマン帝国の興隆の背景を同時代人の視点から分析する目的で執筆された。原文はギリシャ語であったが、チューリッヒ出身のプロテスタント神学者コンラッド・クラウザー（Konrad Klauser, 1515/16-1567）によりラテン語へ翻訳された⁽⁵¹⁾。そのラテン語版を元にフランス語訳が1577年に出版された。その訳者となったのがフランス貴族で学者のブレーズ・ド・ヴィジョネール（Blaise de Vigenère, 1523-1596）で、イエズス会士のリショームとも学術上の接点があったことで知られる⁽⁵²⁾。また、ヴィジョネールの翻訳プロジェクトのパトロンであったのは、フランス宮廷の名家のルイ4世・ド・ゴンザーグ＝ネヴェルス（Louis IV de Gonzague-Nevers, 1539-1595）で、この人物はモンフェラート侯の家系の子孫としていわゆる十字軍家系の末裔である⁽⁵³⁾。フランス語訳は大変な成功を収め、ヴィジョネールの死後は、その家族とアルトゥス・トマ（Artus Thomas）がその仕事引き継ぎ、増補・改訂版の翻訳が1612、1616、1619、1620、1632年に立て続けに再版された⁽⁵⁴⁾。

興味深いのは、1577年の最初の翻訳には記されなかった（つまり原文にはない）偶像崇拜についての記述は、1612年の増補版に初めて登場することである。それは、翻訳の末尾にアルトゥス・トマが付け加えた「マホメットの誤謬に対する十字架の勝利と栄光（*Le triomphe et victoire de la Croix, contre les erreurs de Mahomet*）」の64頁におよぶ論考で展開される。そこには、メッカにおいてアリクテ（Alicthe）とアブーザ（Abuza）の名で呼ばれる女神（ヴィヌス）の偶像が崇拜されているとの説明がある⁽⁵⁵⁾。これらは、それぞれイスラム教が浸透する以前のアラブ世界において崇拜されていた豊穡の女神アッラート（Al-Lat/Allāt）とアル・ウッザー（Al-Uzzā）を指すと考えられる⁽⁵⁶⁾。イスラム教の偶像崇拜という言説は、すでにジョン・トーランが指摘したように、中世にペトルス・アルフォンシ（Petrus Alphonsi）のような護教的著述家によって記述されていたが、その言説を継承する形で宗教改革期に再び執筆したのが、カトリックの著述家のフロリモンド・ド・ラーモン（Florimond de Raemond, 1540-1601）である⁽⁵⁷⁾。彼が1597年に上梓した『反キリスト（*L'Antichrist*）』においては、アルトゥス・トマが用いた表現がそっくりそのまま使われている。特に特徴的なのは、こうした愛の女神たちが「五感の欲び」を約束してくれる「偶像」であるとされている点である。こうした表現は、信仰を全うしたものが行けるという官能的なイスラム教の天国の描写を想起させる内容として成立していた。ラーモンやトマの記述では、こうした偶像が、イスラム化以前だけでな

く、ムハンマド以降の時代にも信仰の対象となっていたとする。こうした批判は、中世に醸成された上記の偶像崇拜言説と組み合わされた上で、新たにイスラム教を誹謗するレトリックとして近世に再び編まれたと言えるだろう。

リショームにおける「偶像崇拜」の意味

それでは、リショームの「偶像崇拜」のレトリックは、上述したような中世以降の対イスラム教の言説の潮流とはどのような関連性があるだろうか。リショーム著作のヴェヌスの偶像を扱った章では、ほぼ同時代のラーモンが用いたような性的な言及が直接用いられているわけではない。しかし、カルヴァン派の信仰が古代人のヴィーナスへの信仰に表面的になぞらえられることで、カルヴァン派の淫蕩が非難され、さらにイスラム教を奉じるトルコ人への批判へとつながっていく⁽⁵⁸⁾。つまり、ここでは、中世に醸成された、官能的な女神の偶像信仰があると言うイスラム教批判が、そのままカルヴァン派へと用いられている。このように、リショームの著作では、プロテスタントとトルコ人の類似性を立証することに心血が注がれており、その類似性の根拠としてあげられているのが、両者の淫蕩を含む悪徳と偶像崇拜である。実際、リショームの『ユグノーの偶像崇拜』では、「偶像崇拜」が何を意味するのかに関し、本質的かつ宗教学的な議論が冒頭に展開されている。その上で、この概念がプロテスタントとイスラム教徒に対し適応できることが論じられている。

まず、リショームに拠れば、偶像崇拜とは「偶像へのカルト（信仰）」を意味するものではあるが、根本的なギリシャ語の語源を探ることで、リショームは二つの「偶像崇拜」の類型を導き出している。第一義の偶像崇拜は、字義通りで物質的な意味での「偶像崇拜」である⁽⁵⁹⁾。古代地中海世界にも浸透した慣習で、リショームの同時代のいわゆる「新世界」における信仰がこれにあたるとされる。つまり宣教師の情報に依拠した日本も、この分類に含まれる偶像崇拜の地としてとらえられていることになる⁽⁶⁰⁾。第二の偶像崇拜は「精神的な」範疇の偶像崇拜であり、リショームに拠れば、より危険性の高いものである。これは、思想家や哲学者が敬う「内的な偶像 (idole intérieure)」で、内に秘められた対象だからこそ、彼らの罪も隠蔽されているのだと言う。これがリショームがプロテスタントを偶像崇拜主義として誹謗する所以であり、またトルコ人たちが「偶像崇拜」であると非難されるのも、同様の理由に拠る⁽⁶¹⁾。

リショームに見られる「偶像崇拜」のこの二義的用法は、何の根拠もなく無から創造されたわけではない。この「偶像崇拜」理解は、実は原始教会の教父たちの時代以来のキリスト教の護教論の長い思想史的潮流、およびイエズス会の学術的伝統に与するものである。偶像崇拜の概念理解は、もともと神学的言説の範疇にある。語源的には、単に「表象」を意味するだけだったが、後に「偶像」の意味を有するようになったギリシャ語の「Eidolon (εἶδωλον)」と、仕え敬う意味の動詞「latreuein (λατρεύειν)」が結合し、イドラトリー（英語：idolatry, 仏語：

idolâtrie, 西語：Idolatría）という語の元となる言葉が形成された⁽⁶²⁾。古くは聖書の十戒、新約聖書の作者の一人であるパウロの著作にその初期の用法が認められる⁽⁶³⁾。基本的に、この術語は、キリスト教の唯一絶対で真正の神以外の誤った神格への信仰を糾弾するために用いられた⁽⁶⁴⁾。つまり「偶像崇拜」という言葉は、正しい信仰の元に集う「われわれ」と、それ以外の信仰を持つ他者を自動的に線引きするための常套的なレトリックであった⁽⁶⁵⁾。したがって、当初は必ずしも物質的に存在する対象（具体的な意味での偶像）への信仰に対して用いられたわけではなく、信仰上の誤謬をもったあらゆる人間（集団、文明）に対しての非難となった⁽⁶⁶⁾。中世においては、既述したようにイスラム教に、そして宗教改革以後はプロテスタントがカトリックを（もちろん糾弾するために）用いた⁽⁶⁷⁾。

リショームは、プロテスタントに対抗するために外面的・内面的偶像崇拜という区分を用いて偶像崇拜の分析を行ったが、これはもともとトマス・アクィナスの神学に由来すると考えられる。その『神学大全（*Summa Theologiae*）』の第二部「人間について」の中の第2部質問第94は、「偶像崇拜について」と題され、表面的な目に見える形での偶像崇拜と、心の中の偶像崇拜が比較されている。アクィナスは、前者が後者ほど深刻ではないという意見を否定し、表面的な偶像崇拜が内面的な偶像崇拜の顕れであり、両方とも罪深いものであるとしている。リショームは、アクィナスの名前こそ直接的に言及もしくは引用しないものの、『ユグノーの偶像崇拜』において全く同じことを反復している⁽⁶⁸⁾。トマス・アクィナスの解釈は、近世イエズス会の偶像崇拜理解の根幹となっており、汎ヨーロッパ的に大きな影響を持ったイエズス会の神学者フランシスコ・スアレス（Francisco Suárez, 1548-1617）も、アクィナスに基づきこのような両義的偶像崇拜の定義を行っている⁽⁶⁹⁾。リショームの言説も、先達のスアレスの論理を表面的に踏襲しているように見えながら、あくまでもプロテスタント（と彼らがカトリックに対して行った批判）が念頭におかれているために、内面の偶像崇拜、すなわち一見して偶像崇拜に見えない行為すら偶像崇拜として糾弾できるようにすることに主眼が置かれている。

この内面の偶像崇拜という概念が発展した背景には、プロテスタントによるカトリックの図像崇拜の批判があったことも見逃せない。16～17世紀にかけて、プロテスタントは図像（image）を偶像とみなしてカトリックの信仰を批判してきた。したがって、フランスのカトリックの思想家にとって、プロテスタントによる図像と偶像の同一視を完全に否定する必要性は強く意識されていた。これが、リショーム著作に見られるプロテスタントへの反論の大前提であった⁽⁷⁰⁾。リショーム自身も、1598年に出版された本に、図像と偶像の違いを強く主張する⁽⁷¹⁾。

「内的な偶像」のレトリックにより、リショームは、イスラム教徒も、ユダヤ教徒も、プロテスタントも、そして新たに確認された「新世界」の信仰すら、「偶像崇拜」という同じ土俵の上で批判対象とすることが出来た。しかし、この比較は、実はオスマン・トルコやプロテスタントが、日本におけるような場所のいわば物質的な偶像崇拜と比べるとより危険であることを強

調することにもなっている。というのは、日本に見られる偶像崇拜は、「真の教え」たるカトリック・キリスト教の教えを知る前の形態であり、その誤謬は宣教によって正され、偶像崇拜者も救いの対象になり得たと考えられていたからである⁽⁷²⁾。一方、イスラム教を奉じるトルコ人やプロテスタントに関しては、真の教えを知りながら、密かに間違った教えを抱き、神のメッセージを解体しようとしているが故に、より有害であると考えられた。つまり、リショームの本における「偶像崇拜」の地としての日本は、オスマン・トルコやプロテスタントの危険性を述べるための比較対象となるべく言及されたに過ぎなかった。

リショームによる「偶像崇拜」レトリックの影響

実際のイエズス会のオスマン帝国における宣教活動では、リショームの著作に見られるような考えが踏襲されたと考えられる。徳川政権の成立後の日本は、周知のようにキリスト教そのものへのコントロールがより組織的に行われ、いわゆる「鎖国」の成立後は、実質的にイエズス会の宣教対象地ではなくなった。その一方で、オスマン帝国領土内におけるイエズス会の宣教は継続されていた。フランス人イエズス会士の宣教師ジョゼフ・ベッソンが1660年に出版した『聖なるシリア (*La Syrie sainte*)』にはその模様が報告される⁽⁷³⁾。本書では、プロテスタントの批判に応える形で、イエズス会のオスマン帝国内での宣教の最終的な目的が偶像崇拜の撲滅であるというレトリックによって正当化されている。つまり、日本のカトリック宣教においては、一神教の概念を容易に受け付けない、緒神仏への信仰が広まっていた状態が偶像崇拜と理解されていたのに対し、シリアやイスラム教の地においては、イスラム教という理念的偶像崇拜に打ち勝つ必要があると論じられる⁽⁷⁴⁾。このイスラム教理解は、リショームが提示した「精神的偶像崇拜」に通じるものである。このような複雑な偶像崇拜のレトリックは、宗教史学的見地からは極めて興味深いことではある。しかし、リショームの考えは、同時代、特にフランスにおいては、必ずしも教会の外部の認識とは協調しなかった。

フランスの歴史家リュシアン・フェーヴルが指摘したように、16世紀後半から17世紀にかけて、オスマン帝国やかの地の宗教・文化に関する書物がフランスにおいて大量に出版された⁽⁷⁵⁾。また、16世紀半ばから17世紀を通じ、イスラム教の聖典コーランの欧州言語による翻訳が出版・流通されることで、「宗教」としてのイスラム教理解が広まった⁽⁷⁶⁾。つまり、一時期までの日本に関する情報と異なり、カトリックの宣教師のみがオスマン・トルコについてのヨーロッパへの情報供給を独占していたわけではない。こうした書物は、従来の固定観念の影響を受けて、イスラム教の影響下の文化を享乐的、攻撃的、なおかつ野蛮であると批判もするが、彼らをリショームのように「偶像崇拜」と誹る説は支配的ではない。「偶像崇拜」は、他者の信仰を否定的にとらえるレトリックであり、「偶像崇拜」というレッテルが貼られた時に、同等の立場が失われ切り捨てられるか、「正しい宗教」により救われるべき対象となるのである⁽⁷⁷⁾。

上記のような印刷物の普及を受けて、17世紀以降のフランスの思想家の多くは、リショームと比較すると寛容なイスラム教認識を持つようになっている。例えば、ブレーズ・パスカル（Blaise Pascal, 1623-1662）は、イスラム教がキリスト教と比肩するような、同じ宗教の範疇に属すと考えている事がうかがわれる⁽⁷⁸⁾。もちろん、イスラム教がキリスト教に比べて劣り誤謬もあるという見解は表明している上に、ムハンマドの権威も批判対象とはなっている。しかし、イスラム教が、偶像崇拜という「間違った」信仰の在り方ではなく、曲がりなりにも宗教の一つであるとみなされていることに注目されたい。

キリスト教とイスラム教の比較は、実際に17～18世紀のフランスでは盛んに行われている。代表的な例を挙げれば、ヴォルテールはイスラム教を、カトリックを暗に批判するための鑑として用いている。彼の執筆した演劇『宗教的熱狂、もしくは預言者マホメット（*Le Fanatisme ou Mahomet le Prophète*）』（1736）は、表題とは裏腹に、イスラム教そのものよりも、宗教的熱狂や理性に欠けた極端なまでの信心を嘆いている。ヴォルテール自身の書簡に拠れば、実際はこの作品はアンリ三世を暗殺したカトリック神父を批判するために書かれているという⁽⁷⁹⁾。1748年の『哲学辞典』では、ヴォルテールは、「全アジアを偶像崇拜から救済した」という点においてイスラム教を評価してすらいる⁽⁸⁰⁾。後世にイスラム教は世界的に普遍性をもつ「世界宗教」の一つであると認識されるようになったが、その萌芽がすでに近世の啓蒙思想家に見られるのである。すなわち、イスラム教は、それ自体文明化された信仰の一形態としてキリスト教と比肩しライバルとなる存在とみなされたのだ⁽⁸¹⁾。

一方、東アジア、東南アジアの信仰の認識については、類似する現象が近代以降に遅れて見られた。19世紀、仏教という範疇が欧米のコンテクストでは一つの系統だった思想体系と認識されるようになり、ロジェ＝ポール・ドロワの言葉を借りれば、仏教は宗教として西欧のアカデミックな文脈で「発明」された⁽⁸²⁾。この時になって初めて、仏教は偶像崇拜の段階より上の、宗教としてキリスト教やイスラム教と比肩する存在として認識されるようになったと言えるだろう⁽⁸³⁾。また、日本固有の宗教として神道という範疇が欧米文化圏において認識されていったのも、いわゆるお雇い外国人たちが、日本固有の信仰に関心を持ち欧米言語での研究を刊行するようになった明治時代以降からである⁽⁸⁴⁾。つまり、17世紀のヨーロッパでは、仏教ましてや神道といった日本の信仰は、未だに一種の「偶像崇拜」として認識され続けていたと言えるだろう。しかも、この信仰形態は、実際に視覚的なイメージを伴って認識されていた。

17世紀半ばには、『中国図説（*China illustrata*）』（1660）の執筆で有名なイエズス会士アタナシウス・キルヒャー（Athanasius Kircher, 1601-1680）が、中国、日本、インドへ派遣された宣教師が持ち帰ったという仏像を収集していた。しかも、そのコレクションを陳列した博物館をローマに開設していた⁽⁸⁵⁾。キルヒャーの死後は、そのコレクションの散逸が危惧されたものの、クレメンス11世（Clemens XI, 1649-1721）の勅令により、博物館は保護を受け、ロヨラ礼拝堂の彫造が制作された17世紀末にはまだ日本の「偶像」をローマで実見することは可能だ

ったはずである⁽⁸⁶⁾。日本の「偶像」は、イスラム教の「精神的偶像」以上に、当時のローマのイエズス会にとっては彫像に刻印するに相応しい対象だったと考えられる。ここにも、ジェズ教会のル・グロ二世の彫像において日本の神格の名前「カミ、ホトケ、アミダ、シャカ」が「偶像」の代表格として描かれていた理由の一端が求められるだろう。

むすびにかえて——可視化される偶像崇拜

リショームの著作の目的は、「真の信仰」たるカトリック教会にとっての「異端」と「偶像崇拜」という二つの敵を描き、批判することにあつた。早くからイエズス会の宣教活動の対象となっていた日本も、「偶像崇拜」の土地として言及はされるが、主な追及の対象となっているのは、遠く閉じられた日本ではなく、より存在感と現実感を伴う脅威であつたプロテスタントとオスマン・トルコで奉じられたイスラム教の方である。この文脈で、日本の信仰は、比較の対象として登場するばかりである。プロテスタントとイスラム教は、両者ともに「精神的偶像崇拜」を行っているとして、理論的にはリショームの著作で日本の信仰以上に非難されるものの、実際にリショームの本の理念が可視化されるにあたり、「偶像」の例として選ばれたのは、「物質的な偶像」である日本の神仏の方であつた。

ロヨラの礼拝堂が完成して間もない18世紀半ば、本論文「はじめに」の冒頭で引用した（脚注1）演劇が、イエズス会ローマ学院で上演された。本作品では、古代ギリシア・ローマ世界の異教の信仰になぞらえられる形で、日本の仏教信仰が舞台上で揶揄される。そして、劇中では、最終的にフランシスコ・ザビエルの教えを受けキリスト教に改宗した王子の力で偶像崇拜が駆逐されるというハッピーエンドが描かれる⁽⁸⁷⁾。同時期、フランスのパリのイエズス会学校でも、日本の信仰が偶像崇拜として描かれる演劇が催された⁽⁸⁸⁾。イエズス会の母教会であるジェズ教会は、ローマを訪れるイエズス会士なら必ず巡礼する場所であり、なおかつロヨラの礼拝堂はジェズ教会を訪れる人なら誰しものが詣でる地点である。そこに刻印された「偶像崇拜」の地としての日本のイメージは、日本宣教の記憶が留められている限り、こうした演劇と共に増幅されていたのだ。目新しい情報があまりもたらされなくなったいわゆる鎖国後の日本は、ジェズ教会のロヨラの祭壇に見られるように、新世界の偶像崇拜の地としての幻想を長きにわたりカトリック文化圏に留めることになったのである。

〔注〕

- (1) Biblioteca Nazionale, V. E., Manoscritti Gesuitici. 31, f. 124 r.
- (2) この演劇の内容については以下に分析されている。Hitomi Omata Rappo, « Un voyage dans les terres païennes du Japon imaginaire. La cérémonie dédiée à « Cami » et à « Fotoqué » dans *Chivanus, Bungi rex*, pièce de théâtre jésuite de Carlo Bovio (1614-1705) », dans *Frontières et altérité religieuse: La religion dans le récit de voyage XVI^e-XX^e siècle*, ed.

- Andreas Nijenhuis-Bescher et al., Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2019, pp. 197-217.
- (3) ヴォルテール著、安斎和雄訳『歴史哲学：「諸国民の風俗と精神について」序論』（法政大学出版局、1989年）p. 175.
- (4) この列聖の詳細な過程は以下に分析されている。Anthony David Wright, “*La sua santità non inclina niente*: the Papacy and the Canonization of Ignatius Loyola,” in *Ite Inflammate Omnia, Selected Historica Papers from Conferences Held at Loyola and Rome in 2006*, ed. Thomas M. McCoog, Rome, Institutum Historicum Societatis Iesu, 2010, pp. 441-456.
- (5) Mia M. Mochizuki, “Jesuit Visual Culture in a Machine Age,” in *The Oxford Handbook of the Jesuits*, ed. Ines G. Zupanov, New York, Oxford University Press, 2019, pp. 449-486.
- (6) 以下にスケッチが遺る。Archivum Historicum Societatis Iesu, ROM 140, f. 2.
- (7) ピエール・ル・グロは、バロック美術の巨匠ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ（Gian Lorenzo Bernini, 1598-1680）の死後、その空隙を埋めるべく活躍の場を得たフランス人彫刻家の一人で、1676年にローマに設立されたローマ・フランス学院に所属し、下記註10のテオドンと共に活躍した。Florence Ingersoll Smouse, « Pierre Le Gros II et les sculpteurs français à Rome vers la fin du XVII^e siècle », dans *Gazette des beaux-arts: courrier européen de l'art et de la curiosité* 55^e année - IV^e période, t. 10, 1913, pp. 203-217.
- (8) この両者の彫刻家が雇われ、その制作の過程がどのように進化したかに関しては、以下の著作に拠る。Pio Pecchiai et Pietro Tacchi Venturi, *Il Gesù di Roma*, Roma, Società Grafica Romana, 1952. 特に契約書に関しては、p. 191、前注1参照。またその美術史的分析については、前注7および注10参照。
- (9) Johannes Erichsen, “Lutero e le immagini,” in *Lutero e i linguaggi dell'Occidente: atti del convegno tenuto a Trento dal 29 al 31 maggio 2000*, ed. Giuseppe Beschin, Fabrizio Cambi, and Luca Cristellon, Brescia, Morcelliana, 2002, pp. 257-276.
- (10) ジャン・バプティスト・テオドンは、17～18世紀を代表する彫刻家で、ルイ14世の財務総監として名を馳せたジャン・バティスト・コルベール（Jean-Baptiste Colbert, 1619-1683）の庇護を受けて、ローマのフランス学院に派遣された。以後30年にわたりローマに滞在し、教皇を始め様々な修道会の注文に応え名声を得た。ジェズ教会の彫刻は、テオドンのローマ滞在の末期である1695～1699年に作成され、その代表作の一つに数えられる。テオドンの事績については、以下に詳しい。Alicia Adamczak, *De Paris à Rome: Jean-Baptiste Théodon (1645-1713) et la sculpture française après Bernin*, diss., l'Université de Paris IV-Sorbonne, 2009).
- (11) Borja Franco Llopis, “Imágenes de la herejía y de los protestantes en el arte efímero de los Austrias,” *Cahiers d'études des cultures ibériques et latino-américaines — CECIL* 4, 2018, pp. 37-61.
- (12) Evonne Levy, *Propaganda and the Jesuit Baroque* Berkeley; Los Angeles, University of California Press, 2004, p. 175, 292, (cit. 161).
- (13) Émile Mâle, *L'art religieux après le Concile de Trente*, Paris, A. Colin, 1932, pp. 437-438.
- (14) その後、ヴァチカン第二公会議以降、他宗教との融和政策を鑑みてこれらの刻印は削られたということである。上野景文『バチカンの聖と俗——日本大使の1400日』（鎌倉春秋社、2011年）pp. 173-175.
- (15) Pasquale M. D'Elia, “The cabalistic meaning of this Roman stone inscription: ‘*Cames Fotoqués Amida et Xaca*,’” *Annali lateranensi: pubblicazione del Pontificio museo missionario etnologico* 25, 1961, pp. 9-13.
- (16) インドおよび日本における偶像崇拜が、宣教師にどのように記録されたかに関しては、複数の記録が以下にまとめられている。浅見雅一「キリシタン時代における偶像崇拜について」（三田史学会編『史学』70巻1号、2000年）pp. 1-35.
- (17) ちなみに、ここで言う「(複数形の) インド」とは、ルネサンス期にいたるまで、「極東」の同

義語として用いられ、現在の地理的概念を度外視して広くアフリカ大陸の未知の部分、さらにはエチオピアまでも指す言葉であった。中世的なキリスト教王国の伝説を背景に、ヨーロッパに理念的に存在した世界観の中では、日本もまた「インド」の一部であった。彌永信美『幻想の東洋——オリエンタリズムの系譜』(青土社、1987年) pp. 32-33、pp. 184-185.

- (18) Janick Auberger, *Quand les Jésuites veulent comprendre l'Autre* Québec, Presses de l'Université du Québec, 2012, pp. 15-18; Touraya Abdallah, «Jean-Pierre Maffei et sa présentation de l'Asie orientale à la fin du XVI^e siècle», *Cahiers d'Histoire* 40, no. 3-4, 1995, pp. 229-238.
- (19) Joan Pau Rubiés, "Theology, Ethnography, and the Historicization of Idolatry," *Journal of the History of Ideas* 67, no. 4, 2006, pp. 571-596.
- (20) Frédéric Cousiné, «L'idole intérieure au tournant du siècle: entre théologie, philosophie et théorie de l'art», dans *Henri IV: Art et pouvoir*, éd. Colette Nativel, Tours, Presses universitaires François-Rabelais, Presses Universitaires de Rennes, 2016, pp. 77-90.
- (21) 全タイトルは: *L'idolatrie huguenote figurée au patron de la vieille payenne, Divisée en huit livres & dédiée au Roy tres chrestien de France & de Navarre Henri III par Louys Richeome provençal de la compag. e de Jesus*. Lyon, Pierre Rigaud, 1607.
- (22) Rouen: Salomon Jumelin, 1610. なお、本書には出版地の異なる様々な版が存在するが、本稿では紙面の都合もあり全てを比較して検証することは出来なかった。今後の課題とする。
- (23) Judi Loach, "Jesuit Ekphrastic Meditation: Louis Richeome's Painting in the Mind," in *Meditation in Judaism, Christianity, and Islam: Cultural Histories*, ed. Halvor Eifring, London; New Delhi etc., Bloomsbury Academic, 2013, pp. 153-171.
- (24) 伊藤博明『綺想の表象学』(ありな書房、2007年) pp. 465-468. イエズス会の当時の建築におけるエンブレムとアレゴリーの重要性については、Gauvin A. Bailey, *Between Renaissance and Baroque: Jesuit art in Rome, 1565-1610*, Toronto, University of Toronto Press, 2003, pp. 18-19.
- (25) 伊藤博明、前掲書、pp. 467-468.
- (26) 例えば、ジェズ教会における様々な天井画については、以下のような研究がそのアレゴリックな背景を検証している。Alison C. Fleming, "St Ignatius of Loyola's 'Vision at la Storta' and the Foundation of the Society of Jesus," in *Foundation, Dedication, and Consecration in Early Modern Europe*, eds. Maarten Delbeke, Minou Schraven, Leiden; Boston, Brill, 2012, pp. 225-249. Reshma Nayyar, "Joshua Stopping the Sun and Ignatius of Loyola at Il Gesù in Rome", *Journal of Jesuit Studies* 3, 2016, pp. 211-237.
- (27) Ralph Dekoninck, «Du frontispice emblématique au frontispice théâtral dans les éditions anversoises au tournant des XVI^e et XVII^e siècle», dans *Polyvalenz und Multifunktionalität der Emblematik*, éd. Wolfgang Harms, Frankfurt am Main, Peter Lang, 2002, pp. 891-895.
- (28) Cousiné, *Op.cit.*
- (29) Anthony Ossa-Richardson, "Image and Idolatry: The Case of Louis Richeome," in *Method and Variation: Narrative in Early Modern French Thought*, eds. Emma Gilby, Paul White, Modern Humanities Research Association, pp. 41-53.
- (30) Ralph Dekoninck, *Op.cit.* 前注27参照。
- (31) *L'idolatrie huguenote*, pp. 1-84.
- (32) *L'idolatrie huguenote*, 第二部、p. 85-239. 最初はこうした異端の証が人間の行動や性格において悪いと考えられる特徴(残酷さ、嘘つなど)となっている。"Des Marques, & Qualitez principales de l'heresie (異端の主な性質と証)". 最初の異端の特徴は傲慢さ (orgueil) とされている (pp. 85-89)。その後、宗教改革派の教義の特徴についても述べられている (例えば、第二部一三章、p. 160: "Que les pretendus Reformez fons plus de cas de la parole des Hommes,

- que de la sainte Ecriture*（自称宗教改革者が聖書よりも人間の言葉を重んじること）”。
- (33) *L'idolatrie huguenote*, 第三部には、ジュピター（Jupiter, p. 281）、サートウルヌ（Saturne, p. 350）とマルス（Mars, p. 362）の偶像崇拜が言及される。第四部では、アポロンの偶像崇拜（p. 397）と様々な異端が論じられる（p. 436）。
 - (34) 第五部、p. 502. 第十三章（pp. 526-527）。
 - (35) 第三部、第十三章（pp. 378-379）。
 - (36) *Idem*, p. 388.
 - (37) *Idem*, pp. 389-390.
 - (38) *Idem*, p. 390.
 - (39) Genève, Paul Mereau, 1608.
 - (40) 彼らの意見の応酬は、以下により詳細に分析されている。Ralph Dekoninck, «L'imagination idolâtre et l'idolâtrie fantasmée. La guerre des images entre L. Richeome et J. Bansilion», dans *Henri IV: Art et pouvoir*, éd. Colette Nativel, Tours, Presses universitaires François-Rabelais, Presses Universitaires de Rennes, 2016, pp. 67-75. ジャン・バンジリオンが『偶像崇拜のカトリック教徒』で展開した論理は、スイスのフランス語圏の宗教改革者ギヨーム・ファレル（Guillaume Farel, 1489-1565）に神学的根拠が認められる。その背景については、Olivier Christin, *Une révolution symbolique: l'iconoclasme huguenot et la reconstruction catholique*, Paris, Les Éd. de Minuit, 1991, p. 166.
 - (41) Jean Bansilion, *L'idolatrie papistique*, p. 368.
 - (42) *Idem*. ここでは、バンジリオンは教皇自身がマルス神の偶像であると明言する。
 - (43) Louis Richeome, *Le Panthéon Huguenot découvert et ruiné, contre l'auteur de l'Idolatrie Papistique*, Rouen, Salomon Jumelin, 1610.
 - (44) *Idem*, p. 312.
 - (45) *Idem*, p. 313.
 - (46) 他にも、こうした例は、Norman Daniel, *Islam and the West: the making of an image*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 1960, pp. 284-293 に紹介されている。
 - (47) 例えばコルドバのアルヴァルスとエウロギウス（Alvarus, ?-ca. 861; Eulogius, 800-859）により執筆された『スペイン殉教伝（Pasionario Hispánico）』がある。彼らについては、ケネス・バーナード・ウルフ、林邦夫訳『コルドバの殉教者たち—イスラム・スペインのキリスト教徒』（刀水書房、1998年）。ほかにも、フランス人修道士エメリック・ピコー（Aymeric Picaud, ?-?, 12世紀）作とされる『聖ヤコブの書（Liber Sancti Iacobi）、カリクストゥス写本（Codex Calixtinus）』における記述、ペドロ・アルフォンソ（Pedro Alfonso, 1126-1173）の『反ユダヤ的対話（Diálogo contra los Judios）』（ca. 1109）、クリュニー修道院長であった尊者ピエール（Pierre le Vénérable, 1092/94-1156）による『サラセン人の異端的宗派への論駁（Liber contra sectam sive haeresim Saracenorum）』などがある。このようなキリスト教護教的文学に関しては、以下の研究に詳細に述べられている。John Victor Tolan, *Medieval Christian Perceptions of Islam* New York; London, Garland Publ., 1996, Inés Monteiro Arias, «Mahomet Pseudo-Prophète et les Musulmans Idolâtres dans la sculpture romane (IX^e-XVIII^e siècle)», in *The Image of the Prophet between Ideal and Ideology: A Scholarly Investigation*, ed. Christiane Gruber and Avinoam Shalem, Berlin; Boston, de Gruyter, 2014, p. 170.
 - (48) Maria Effinger et al., hrg. *Götterbilder und Götzendiener in der Frühen Neuzeit: Europas Blick auf Fremde Religionen*, Heidelberg, Universitaetsverlag Winter, 2012, p. 52. に指摘される。原本は、オックスフォード大学ボードリアン図書館（Bodleian Library）所蔵。Ms. Bodl. 968, near 1451, Fol. 72.
 - (49) Sophia Rose Arjana, *Muslims in the Western Imagination*, Oxford, Oxford University Press,

2015, pp. 33-35.

- (50) パリのイエズス会のクレルモン (Clermont) 学院 (1564-1682) の建設のために、サン＝ジャック通りに面した建物をイエズス会は1653年頃購入した。これは後にルイ＝ル＝グラン学院 (1682-1762) となった教育機関の前身となった。Marie-Madeleine Compère, *Les collèges français 16-18^e siècle. Tome 3. Répertoire Paris* Paris, CNRS, 2002, p. 361. サン＝ジャック通りの名は、それ以後イエズス界の教育機関の代名詞のように用いられることとなった。また、同通りに出版所・書店を構えたセバスティアン・クラモワジー (Sébastien Cramoisy, 1584-1669) とクロード・シャプレ (Claude Chappelet) はイエズス会を顧客として富を築いた。Marc Fumaroli, *L'âge de l'éloquence: rhétorique et "res literaria" de la Renaissance au seuil de l'époque classique*, Paris, Albin Michel, 1994, p. 250. 木村三郎『ニコラ・プッサンとイエズス会図像の研究』(中央公論美術出版、2007年) pp. 244-247.
- (51) クラウザー自身は、宗教改革で分裂するドイツ語圏の状況を憂慮し、内部で分裂し合うことは、オスマン帝国の脅威にさらされる現在、東ローマ帝国のような結末を導くのではと危惧し翻訳を行った。Paul Widmer, „Bullinger und die Türken. Zeugnis des geistigen Widerstandes gegen eine Renaissance der Kreuzzüge,” in *Heinrich Bullinger: Leben, Werk und Wirkung, Bd. 1*, hrg. Emidio Campi and Peter Opitz, Zürich, Thologischer Verlag, 2004, p. 609.
- (52) Richard Crescenzo, « Blaise de Vigenère et la littérature de spiritualité du XVII^e siècle », dans *Blaise de Vigenère, poète et mythographe au temps de Henri III*, ed. Centre V.L. Saulnier, Paris, Presses de l'École normale supérieure, 1994, pp. 163-166; S. Melion Walter and Ralph Dekoninck, “Jesuit Illustrated Books,” in *The Oxford Handbook of the Jesuits*, ed. Ines G. Zupanov, New York, Oxford University Press, 2019, p. 529.
- (53) 十字軍家系と呼ばれるようになった特定の家系の貴族らは、財政上の大きな負担にも関わらず、また法的拘束があったわけでもないが、信仰・義務感・名誉感から招集に応じて代々十字軍に参加した。八塚春見『十字軍という聖戦——キリスト教世界の解放のための戦い』(日本放送出版会、2008年) pp. 168-170.
- (54) Grégory Rabaud, « L'énigme « Artus Thomas, sieur d'Embry, Parisien » », *Annales de Bretagne et des Pays de l'Ouest* 124, no. 1, 2017, pp. 85-112.
- (55) 1612年版、アルトゥス・トマの論考の8頁目。
- (56) この女神たちの信仰とその伝来に関しては、Zofia Brzozowska, “The Goddesses of Pre-Islamic Arabia (Al-Lāt, Al-Uzzā, Manāt),” in *Byzantium and the Arabs: the Encounter of Civilizations from Sixth to Mid-Eighth Century*, ed. Teresa Wolińska and Paweł Filipczak, Łódź, Łódź University Press, 2015, pp. 55-82.
- (57) Florimond de Raemon, *L'anti-Christ, et l'anti-papesse*, Paris, Abel l'Angelier, 1608, p. 268. John Victor Tolan, *Op.cit.* ラーモンの思想と人生については、Barbara Sher Tinsley, *History and Polemics in the French Reformation: Florimond de Raemon, Defender of the Church*, Selingsgrove, Susquehanna University Press, 1992.
- (58) 前注34参照。
- (59) *L'idolatrie huguenote*, p. 11.
- (60) *Idem*, pp. 13-16.
- (61) *Idem*, p. 21.
- (62) 日本語によるこの語の詳細な語源については以下に詳しい。滝口晴生「偶像崇拝の記号論(1)」(『山梨大学教育人間科学部紀要』第12巻、2010年) pp. 259-268.
- (63) パウロ、およびそれより遡るティトゥス・フラウィウス・クレメンス (Titus Flavius Clemens, ca. 150-ca. 215)、テルトゥリアヌス (Tertullianus, ca. 160-ca. 220) における偶像崇拝という言葉の用い方に関しては、Daniel Barbu, « Idole, idolâtre, idolâtrie », in *Supplemento a Mythos, Rivista di Storia delle Religioni*, 2, ed. Corinne Bonnet, Amandine Declercq, and Iwo

- Slobodzianek, Palermo, Salvatore Sciascia Editore, 2011, pp.31-49.
- (64) Daniel Barbu, *Naissance de l'idolâtrie: image, identité, religion* Liège, Presses universitaires de Liège, 2016, p. 14.
- (65) Idem, p. 13.
- (66) Idem, p. 14.
- (67) そのために、1560年代以降フランス各地において偶像破壊活動が行われた。これは、ツウィングリによるカトリック偶像批判を受けて、同時代に起きたイギリスでの偶像破壊活動の影響も受けていた。その発端となった偶像崇拜のプロテスタントにおける解釈の広がりには、Christin, 前掲論文, *Une révolution symbolique: l'iconoclasme huguenot et la reconstruction catholique*, pp. 50-67.
- (68) “*l'Idolatrie extérieure n'est jamais sans l'intérieure*” (p.19).
- (69) スアレスの理論に関しては、浅見雅一『キリシタン時代の偶像崇拜』（東京大学出版会、2009年）p.58。
- (70) 16世紀のカトリック神学者の偶像理解について、François Lecercle, « *Des yeux pour ne point voir* ». Avatars de l'idolâtrie chez les théologiens catholiques, au XVI^e siècle », dans *L'Idolâtrie-Rencontres de l'École du Louvre*, ed. École du Louvre, Paris, La Documentation française, 1990, p. 35-51. を参照。興味深いことに、16世紀中葉に既に、カトリックがプロテスタントをヴィーナスなどの古代の神々の崇拜者として揶揄する例がみられる（Christin, *Op.cit.*, pp. 157-158.）。
- (71) Louis Richeome, *Trois discours pour la religion catholique: des miracles, des saints et des idoles*（カトリック教のための三言説：奇跡、聖人、偶像について）, Borgeaud, S. Millanges, 1598, p. 468. この問題の背景について、Ralph Dekoninck, « Des idoles de bois aux idoles de l'esprit. Les métamorphoses de l'idolâtrie dans l'imaginaire moderne », *Revue Théologique de Louvain* 35, no. 2, 2004, p. 203-216. を参照。また木村三郎、前掲書注50、pp. 46-49.
- (72) Rubiés, *Op.cit.*
- (73) J. Besson, *La Syrie sainte, ou la mission de Jésus et des Peres de la Compagnie de Jésus en Syrie, divisée en deux parties*, Paris, Jean Henault, 1660. この書とイエズス会のオスマン帝国宣教については、Loubna Khayati, « *Confutatio alcorani* et édification: les Relations des missionnaires jésuites dans l'empire ottoman au XVII^e siècle », dans *De l'Orient à la Huronie: Du récit de pèlerinage au texte missionnaire*, eds. Guy Poirier, Marie-Christine Gomez-Géraud, and François Paré, Québec, Presses de l'Université Laval, 2011, p. 306.
- (74) この書に表現された他者としてのイスラム像は、以下に分析される。Michael Harrigan, *Veiled Encounters: Representing the Orient in 17th-Century French Travel Literature*, Amsterdam; N.Y., Rodopi, 2008, pp. 80-86.
- (75) リュシアン・フェーヴル著、関根素子、宮下志朗、長谷川輝夫、月村辰雄訳『書物の出現（下）』（ちくま学芸文庫、1998年）p. 191。
- (76) 井村行子『異教徒から異人種へ』（有志舎、2008年）pp. 24-25.
- (77) 特に近世の西ヨーロッパにおいて「偶像崇拜」の術語がどのように用いられたのかに関しては、以下の研究を参照。Barbu, « *Idole, idolâtre, idolâtrie* », pp. 63-64.
- (78) パスカル『パンセ』「第九編 諸宗教」および「他宗教の虚偽」に関する記述に拠る。（由木康訳『パンセ』白水社、1978年）p. 267.
- (79) Voltaire, *Lettres inédites de Voltaire*, Didier, 1856, t. 1, Lettre à M. César De Missy, 1er septembre 1742, p. 450.
- (80) Voltaire, *Dictionnaire philosophique*, “Alcoran ou le Coran”, Paris, Éd. Garnier, Tome 17, p. 404.
- (81) このような過程を、宗教学者のギー・ストロムザは、学問としての宗教学・比較宗教学の形成としてとらえた。Gedaliahu A. G Stroumsa, *A New Science: The Discovery of Religion in the Age of Reason*, Cambridge Mass., Harvard University Press, 2010.

- (82) その証拠として、19世紀になるまで「仏教」は術語としては存在しなかった。その初出は1800年前後で、1820年代によく言葉として定着するようになった。ロジェ＝ポール・ドロワ著、島田裕巳訳、田桐正彦訳『虚無の信仰——西欧はなぜ仏教を怖れたか』(トランスビュー、2002年) p. 25.
- (83) キリシト教をひな形として「宗教」という範疇が整えられ、近代以降に非ヨーロッパの各地の信仰が、西欧近代学術によって「宗教」として拾い上げられていった過程は以下に詳しい。増澤知子『世界宗教の発明——ヨーロッパ普遍主義と多元主義の言説』(みすず書房、2015年)。
- (84) 欧米言語による神道研究史からこの流れは明らかとなる。ラポー・ガエタン「欧米言語による中世神道研究」(伊藤聡ほか編『中世神道入門』勉誠出版、近刊) pp. 26-34。それ以前の宣教師らの偏った「神道」観は以下の資料にみられる。ゲオルク・シュールハンマー『イエズス会宣教師が見た日本の神々』(青土社、2007年)。
- (85) Aldo Mastroianni, "Kircher e l'Oriente nel Museo del Collegio Romano", in *Athanasius Kircher. Il Museo del Mondo*, ed. Eugenio Lo Sardo, Roma, Edizioni De Luca, 2001, pp. 65-75.
- (86) Babette Moser, „Neues Wissen für Europa. Die Korrespondenz und das Museum des Jesuiten Athanasius Kircher“, in *Sammeln, Vernetzen, Auswerten: Missionare und ihr Beitrag zum Wandel europäischer Weitsicht*, Reinhard Wendt hrg., Tübingen, Narr, 2001, p. 60 (45-70).
- (87) Omata Rappo, 前掲論文, «Un voyage dans les terres païennes du Japon imaginaire. La cérémonie dédiée à «Cami» et à «Fotoqué» dans *Chivanus, Bungi rex*, pièce de théâtre jésuite de Carlo Bovio (1614-1705)». (前注2参照)
- (88) Hitomi Omata Rappo, "Japanese Martyrs in French Jesuit Drama (late seventeenth-early eighteenth century). Between Violence and *Bienséance*," in *Jesuit studies Special Issue: Japan on the Jesuit Stage*, eds. Haruka Ôba, Akihiko Watanabe et al., Leiden, Brill, 2021 (forthcoming).

掲載写真一覧

- 写真1 Chiesa del Santissimo Nome di Gesù all'Argentina, Roma (ローマ、ジェズ教会)、イグナチウス・ロヨラ礼拝堂写真(筆者による撮影)。
- 写真2 ジェズ教会、ロヨラ礼拝堂の左脇、ジャン・パプティスト・テオドン (Jean Baptiste Théodon) 作「偶像崇拜を地に倒す真の信仰 (*La Foi terrassant l'Idolâtrie*)」部分 (1988年10月18日撮影)。元駐バチカン市国日本大使上野景文氏提供。
- 写真3 ピエール・ル・グロ (小もしくは二世) (Pierre Le Gros, le jeune もしくは II, 1666-1719) 作「異端を踏みにじる宗教 (*La Religion foulant aux pieds l'hérésie*)」(筆者による撮影)。
- 写真4 ジャン・パプティスト・テオドン作「偶像崇拜を地に倒す真の信仰」(筆者による撮影)。
- 写真5 Louis Richeome, *L'idolâtrie Huguenote. Figurée au patron de la vieille payenne*, Lyon, Pierre Rigaud, 1607. 扉絵 Bibliothèque municipale de Lyon.
- 写真6 Louis Richeome, *Le Panthéon huguenot découvert et ruiné*, Rouen: Salomon Jumelin, 1610. 扉絵 Dutch National Library.

〔付記〕

本研究は、日本学術振興会特別研究員 (PD) 研究奨励費による研究成果の一部である。
また貴重な写真を提供いただいた上野景文氏に感謝いたします。

(おまたらぼー ひとみ 佛教大学非常勤講師)

2020年11月16日受理

